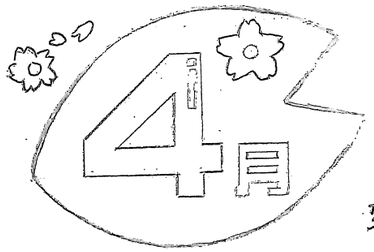
月刊

利根日石新聞

2009年11月1日 創刊 平成31年4月号

第000115号

発行
利根日石株式会社 TEL:0278-24-1635
本社販売管理課 FAX:0278-23-7980

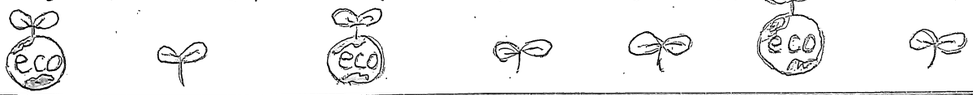


お彼岸をすぎてからも、冬に戻ったような寒い日がありましたが、一日ごとに暖かくなって、春が来ているのはまちがいないです。春は季節の変わり目、環境の変化もある時ですネ。別れがあったり、出会いがあったり。

平成であります。の年号も、今月でラスト 来月から『新しい年号』であります。
10年続いています 利根日石新聞 これからも どうぞよろしくお願い申し上げます。

※わが家では、今、ふきみそにはまっていて、ふきのとうを採ったり、頂いたりで、4~5回作っています。おにぎりにもあいますよ。

前日17号(国道)を通った時 利根川を見てみると、川の水がいつもよりずいぶん少なく今になっては谷川岳や周りの山々の雪が少ないのがよくわかります
昨年の初雪もいつかな?と待っていた人がいる中 今年になってからの雪は少なく生活するには便利でしたが雪が降らないと困る場所や人たちにとっては大変ですよ!!日本の平均気温は1898年から100年あたりおよそ1.1度上昇していて日本は気温が上がりやすい北半球の中緯度にある為冬の最低気温0度以下の日が毎年少なく夏は熱帯夜と猛暑が増えていて今年の桜も平年より5日早く咲き地球は過去1,400年でもっとも暖かく海の魚や農作物、資源に影響が出てしまう!!もちろん、大雨やゲリラが続き台風も増えると考えられています
私に出来る事は何かと考えてみると 多くの便利な電気製品に囲まれているので まずは主電源をこまめに切る。シャワーを流しっぱなしにしない 歯をみがく時の水はストップ!! クールビズはもちろん まめである自分を作る事からゴミをなるべくださない工夫を考えます 青い地球灰色になってしまっては



太陽光発電 2019年問題とは?

最近、太陽光発電の「2019年問題」という言葉を見聞きします。太陽光発電の固定価格買取制度が始まって今年でちょうど10年になります。2009年11月にスタートした固定価格買取制度は太陽光で発電した電気を1キロワットあたり48円で10年間買い取り続ける、というものでした。つまり、この制度で最初の年に設置した太陽光発電設備の買取期間が終了することを「2019年問題」と呼んでいます。

買い取り期間が終わった太陽光発電設備はどうなるのか? 今年買い取り期間が終了する設備は全国で53万件あります。来年終了する設備は73万件、再来年は100万件と、今年以降、続々と発生する買い取り期間が終了する設備の、その先の使い方に注目が集まっています。
現在、考えられる選択は大きく分けて以下の2つ。

① 安価な単価で買取りを継続させる
② 蓄電池を設置して電気の自給自足をする

①は手続きをするだけで、特に費用はかかりません。ただし、48円という大変高価な買取単価に比べると相当安価な単価(11円~12円と言われている)に引き下げられる為、月々の収入は大幅にダウンしてしまいます。
②は少なくとも100万円以上の設置費用が必要です。しかし、設備と使い方によっては電気代をゼロに近づけることも可能ですし、災害などで停電になっても電気が使えるメリットがあります。

2019年問題には別の側面もあります。それは今年度の売電単価(買取単価)が24円となり、普通に購入する電気の単価とほぼ同額となったことです。来年以降は逆転し、売るより、使う方が高価になります。家庭用太陽光発電はまず家庭で使い、余った電気を電力会社が買い取っています。その買取価格が高かったのでなるべく昼間に使う電気を減らし、より多く売った方が得だった今までの構図が崩れます。安く売るくらいなら、使った方が得になります。今までは深夜に衣類や食器を洗っていましたが、これからは昼間に洗うようになるでしょう。

10年前、まだ高価で特別な設備だった太陽光発電は、補助金や高い買取単価など金銭面で優遇されてきましたが、コストダウンした今後は水力や火力などと肩を並べる電力のひとつになってゆきます。
当初は売電して収入を得ることが大きな目的でしたが、これからは賢く使い、環境負荷と電気代のコストを押し下げ、電気の自給自足を目指す事が目的になっていきそうです。